毎日新聞
2015年(平成27年)11月27日(金)夕刊 夕刊ワイド 2

Cinema 映画

「死の問題」に目を背けないで

医師・長尾和宏さんに聞く

「ハッピーエンドの選び方」が描くもの

人生の最期をどう選ぶのか、というテーマをユーモラスに描くイスラエル映画「ハッピーエンドの選び方」（1時間33分）が28日から大阪のテアトル梅田ほかで公開される。穏やかな死の迎え方について執筆や講演を続ける兵庫県尼崎市の医師、長尾和宏さん(57)＝写真＝は「たくさんのテーマを持った作品。目を背けてしまいがちな死の問題を考えるきっかけになる。医療を志す学生など多くの人に見てほしい映画だと思う」とその魅力を語る。

発明好きなヨヘスケルは、妻と仲良くエルサレムの老人ホームで暮らしている。ある日、親友マックスが望まぬ延命治療を受けているのを目撃。その妻ヤナからも「夫を苦しみから解放して」と懇願され、苦しまずに最期を迎える装置を発明する。法律では殺人罪に当たることを覚悟の上、仲間と実行に移す。

©2014 PIE FILMS/2-TEAM PRODUCTIONS/PALLAS FILM/TWENTY TWENTY VISION.

日本は、終末期医療についての生前の意思表示「リビングウイル」が法的に担保されていない先進国で唯一の国だ。「イスラエルも同様に厳しいようだ。死の問題に対して真面目できちょうめんに捉えるところが日本と似ていると感じた」と長尾さんは話す。ヨヘスケルは、愛する人の認知症という困難にも直面する。長尾さんは「認知症で終末期の人の意思決定を誰がどう支援するのかというのは世界的な課題」と指摘。「映画を見て、自分だったらどうするかということをシミュレーションすること、そして身近な人と話し合うこと。それがとても大切ではないか」と力を込めた。

【花澤茂人】